

## 中間言語分析：「態」の転移

鈴木 広子<sup>\*1</sup>

### 1. はじめに

日本人英語学習者の production (話す, 書く 英語) には, 英語らしくない表現・言い回しが観察される。また, 「話す」ときにとっさにでてしまった語が主語として誤った選択であったために言いよどむことがある。その原因の一つは, 学習者が母国語である日本語の習得過程で獲得した言語に関する知識を, 英語の production において, 意識的にあるいは無意識的に転移 (transfer) していることにあると思う。そこで, 日本人特有の英語の表現・言回しを収集し, 日本語の特徴を考慮に入れて, そのような表現が産出される背景を分析しようと試みた。

これまでの研究 (Iwata et al., 1990, 松浦他, 1991, Suzuki and Kamimura, 1991, Suzuki et al., 1992) の結果では, 文を組み立てる時の日本語と英語の発想の違いが最も顕著に表れるのは, 何を主語に置き, その主語との関連でどのような態 (voice) を使うかという点であった。しかし, さらにみていくと, 与えられた日本語の文構造が同じであっても, 産出された英語の文構造に一定の傾向が見られるとは限らなかった。つまり, 英語の文の産出過程で, 日本語の表面的な文構造の知識を, 単純に転移させているわけではないのではないかという疑問が出てきたのである。そこで, 日本語の「なる言語」, 「立場志向」型の言語としての特徴と英語の「する言語」, 「事実志向」型の言語の特徴を比較して (池上1982, 水谷1985), 「コミュニケーションに関するテスト」で収集されたデータ (Suzuki et al., 1992) から, 中間言語における転移について再考することにした。とくに, 文の表層レベルに対する深層レベルの

<sup>\*1</sup> 本論文の作成にあたり, ご助言いただきました神奈川大学外国語学部教授国広哲弥先生に深く感謝いたします。

意味構造について、また、文の意味解釈における学習者のスキーマについて考えてみた。

## 2. 日本語の主語と態

### 2.1 「めいわくの受身」

立場志向型の日本語の特徴的なものに「めいわくの受身」がある。人称主語の受身文で、動作の対象である人間、主として話者自身の立場、心情が強調されているような意味を持つ（水谷，1982）。

例 1 : a) 隣人が夜遅くピアノを弾いた。

vt

b) 隣人に夜遅くピアノを弾かれた。

vt 受身

c) My neighbor played the piano very late last night.

動作主

vt

I was upset about that.

話者の心情

例 1 b) のように、日本語では受身文にすることで、「迷惑だった」という話者の気持ちが表されるが、「事実志向」型といわれる英語では、同じ意味を、動作主を主語にした能動態で表現するのが普通である。日本語の文に込められているこの迷惑な気持ちは、英語では、顔の表情、声の調子で表現するか、その気持ちを伝える表現を付け加えなければならない（Iwata et al., 1990）。例えば、「(彼に)花瓶を割られた」という意味を、英語で表現するテストを行うと、テストを受けた大学生のうちの40%以上が使役文、または、文法的に誤りがあるがそれに近い形の構文を使う。

図 1 は、英語と日本語の表現の違いを示している。英語は「めいわくの受身」にあたる構文がない。そこで、行為者が何をしたかという事実を表す文 “He broke the vase.” と、話者が行為者に対してどういう気持ちであるかという心情を表す文 “I felt upset.” の二段構えで、「めいわくの受身」文が持つ「事実と心情」の意味を表現することになる。「めいわくの受身」だけでなく、日本語の動詞は、その形から主語と目的語が明確になり、2つの関係から、話者の気持ちが含まれる傾向にある。例え

ば、「お手紙を拝見しました」の「拝見する」は謙譲語で、感謝の気持ちを感じられる。しかし、英語の直訳である“I received your letter.”はいかにも機械的だ。そこで、“Thank you for your letter. I received it today.”のように感謝の気持ちを表す言葉が必要になる(外山, 1992)。

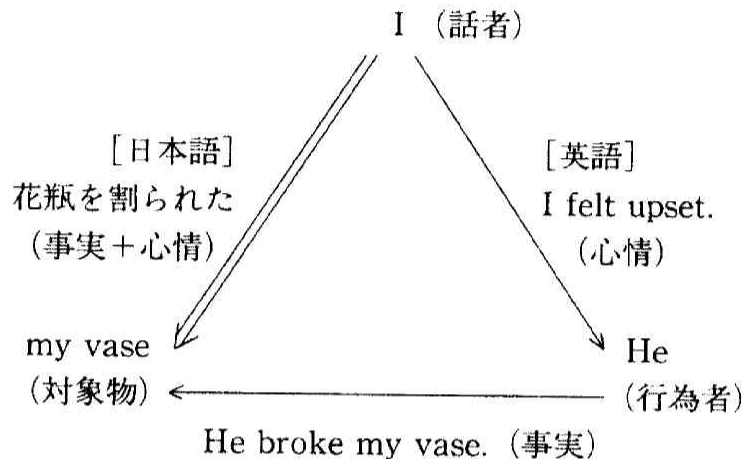


図1：日本語の受身文と英語 (Iwata et al., 1990)

大学生は、事実と心情の両方を英語でも1文に表そうとして、使役文“I had my vase broken.”を使ったのであろう。実際、“I had him break my vase.”という誤文が一割近くあったことから推測できる。このように、日本語は行為を受ける対象に焦点をおく傾向がある。したがって、英語のように動作主を主語におくと「めいわくの受身」とは逆に動作主が強調され、行為を受けた話者が行為の主体である動作主を責めている感じがする。

例2：弟が私の花瓶を割ったのよ。

「めいわくの受身」は自動詞でも起こる。その状態、行為は、主語の人間の意志とは関係なく一方的に起こった出来事として捉えられる。英語の自動詞は受動態にならない(水谷, 1985)。

例3：a) 女房に逃げられた。      b) His wife ran away.  
c) 雨に降られた。      d) It rained (upon me).

人称主語の受身文が必ずしも被害を表すものとは限らない(水谷, 1985)。

例4：a) ジョーンズさんに子守を頼まれた。

b) Mrs. Jones asked me to babysit for her.

しかし、例 4 a) は、文の深層レベルの意味構造が、それまでの例とは違うことを指摘しておかなければならない。<sup>\*2</sup> 例 1 b), 3 a) では、

1 b) [私は [隣人がピアノを弾いた] られた]  
vt

3 a) [私は [女房が逃げた] られた]  
vi

のように、他動詞でも自動詞でも「(ら)れる」で表される受身形は、第三者の行為全体にかかって「私」に関連づけられている。ところが、例 4 a) では、行為の対象を強調させるために、省略されてはいるが「私」を主語に置いて、単に動詞を受身形にした構造になっている。

4 a) [私はジョーンズさんに子守を頼ま — れた]  
vt

したがって、前者が「めいわくの受身」、後者は英語の場合と同じ機能で使われている受動態の文である。このように、表層レベルでは同じ形でも深層レベルでは 2 種類の意味構造が違う受身文であることがわかる。「花瓶を壊された」の英語に受身文より使役文のほうが圧倒的に多く使われたのは、学習者がこの受身文の深層構造を無意識に認知して第三者の行為と自分（話者）との関係を表現したかったからではないだろうか。

非人称主語をとって受身文にしている例 5 を見ると、「めいわくの受身」とは構造が違うことがさらに明らかになる。

例 5：内閣が組織され、新しい閣僚の顔ぶれが発表された。

英語では、動作主にあまり関心がない場合、文を受動態にして動作の対象を主語に置き、動作主 (by 以下) を省略するが、例 5 でも同じ意図で受動態が使われている。したがって、例 5 は英語でも受動態の文にして問題ない。

場面や語彙の違いによって、英語の受動態を日本語では自動詞を使った文で表わすことがある。

例 6：I was notified by the tax office that I have to pay more than 1,000 dollars.

<sup>\*2</sup> 「めいわくの受身」文は、英語の受動態と同じ意味の受身文と深層レベルの意味構造が違い、日本語には意味構造の違う 2 種類の受身文があることを国広哲弥教授より指摘された。

下線部分を日本語に直訳すると「税務署に通知された。」となるが、「税務署から通知が来た。」のほうが自然な感じがする（水谷，1985）。ここでは、「通知する」という他動詞を受身形「通知される」にすることで動作主「税務署」の行為が「私」に影響を及ぼす「めいわくの受身」文として捉えることができるので不自然に感じるのである。

英語は動作受動態（actional passive）と状態受動態（statal passive）の区別があるが、日本語では、自動詞に「～た」をつけて動作、「～ている」で状態を表し使い分けている。

例 7 : a) The door was shut at six when I went by, but I don't  
statal passive

know when it was shut .  
actional passive

b) 6 時頃通りかかったとき、ドアは閉まっていたが，  
vi の状態

いつ閉まったかはわからない。  
vi の動作

（水谷，1985）

例 7 b) も例 7 a) の場合と同じように動詞を他動詞の受身形「閉められた」，「閉められていた」にすると動作主が思い浮かんでくるので，動作主を明示しない英語の受動態の意図を日本語で表現するには自動詞を使うのが適当である。

## 2.2 「なる」言語

日本語は行為を受ける対象が強調され，動作主がぼやかされるので，動詞が受身になり，さらには自発の意味で使われることもある。例えば，「～と思われる」，「～と言われている」は，話者が動作主になる受身と考えられるが，「一般的な考え方である」，「常識である」という意味で使われるときは，これらの動詞の形は自発態である（池上1988，寺村1991，荒木1985）。このように，日本語はあたかも自然にその状態になったかのような表現をする傾向があり，「無生物主語＋自動詞」の構文を使って，実際の動作主とは関係なくその事態が起こったような表現をするのである。

例8 : a) 大きな小包がきた。  
無生物 vi

b) We got a big parcel.  
動作主 vt

同じ意味を、英語では動作主を主語にして他動詞を続ける文が自然である。このような日本語の性質の影響で、日本人の英語学習者が日本語の受身、自発文を頭に思い浮かべると、その意味を英語にするとき、動作主が思い浮かばない、あるいは主語として置くべき語の選択を誤るといった問題が出てくる。一方、英語は動作主の重要性が強調され、動作主が明らかでない場合は、it, somebody などの主語を形式的に立てて、文法的な整合性をもたせることがある。

例9 : a) Someone ate the apple pie I left here.

b) ここに置いておいたアップルパイを食べられちゃった。

例9 b) は「めいわくの受身」で、話者の被害にあったという気持ちが強調され、動作主（食べた人）は明らかにされない。英語では、他動詞“eat”の動作主を“someone”にして主語に置く。

さらに、英語には「無生物主語＋他動詞」の構文が可能である。基本的に日本語にはない構文なので、この構文の日本語は擬人的に聞こえる。

例10 : a) This book encouraged me to go abroad.

b) この本が私を留学する気にさせた。

例10 b) をもう少し自然な形に直すには、動作主を人間に変えた構文にする必要があり、「この本を読んで、留学する勇気がわいた」となる。したがって、学習者が日本語のこの複文の形を思い浮かべたところから、習慣のない無生物を主語にとって他動詞を続ける構文に変えることは難しいだろうと推測される。

行為を受ける対象が強調される日本語では、使役の文を能動態で表現することがあり（金田一，1988）、動作主が不明確になる。

例11 : a) 太郎は髪を刈った。

b) John had his hair cut.

c) John cut his hair. (池上，1991)

例11 a) では、太郎の髪型が変わったことが強調され、自分で刈ったのか、床屋で刈ってもらったのか、動作主がはっきりしない。英語では、

例外もあるが、一般的に使役文にすることで、第三者が動作主として関与していることが明確になる。

話者の関心のあり方によって、焦点が当てられる語を中心に構文が決まるという点は、日本語と英語に共通する。しかし、日本語は、無生物主語と自動詞の構文が典型的で、動作主よりも行為を受ける対象に焦点が置かれる傾向にある。したがって、動作主を主語に置くと動作主が強調され、たとえば、「めいわくの受身」文を動作主を主語にした文に直すと、動作主を責めている感じがする。一方、英語は動作主とその行為を表す他動詞で構成される文が中心で、動作主が明確でない場合も、文法上の整合性をもたせるために、it, somebody などの主語を立てる。日本語では、人間か生物が主語になり、動詞の意味から暗示される主語は落ちることが多い。無生物が主語になるときは自動詞が続くのが普通で、他動詞をとって人間を目的語とするようなことがあれば、主語が擬人化されたと感じられ、日本語らしくない。以上のように日本語らしさと英語らしさを比較していくと、日本語らしさの影響が、他動詞を使い、無生物主語の行為が人間（生物）にも及ぶという英語らしい発想を難しくしている（外山，1992）。

### 3. データ分析

#### 3.1 テストの手順

データ収集のために「コミュニケーションに関するテスト」が作成された（Suzuki et al., 1992）。いくつかの参考文献をもとに（水谷1985，小島1987，金田一1988，国広1988，池上1988）日本語と英語の発想の違いが比較的顕著にでている文法項目を4つ選定し、各項目について5問、合計20の質問（ミニ会話）を用意した。このテストは、4，5行の簡単な会話の一部を穴埋めする筆記試験である。

例12：[6] Jim : Wow! My notebook!

Haruo : What's up, Jim?

Jim : Can you get me a towel, Haruo? Hurry!

(コーヒーがノートにこぼれちゃったんだ。)

☆ I've spilled the coffee on the notebook.

☆は目標とするモデル文



被験者は、まず、問題の会話を読んで状況を判断する。会話の空欄に入れるべき英語の意味を日本語で口頭で与えられる。空欄に記入後、その英語が日本語の直訳になっていないか、会話の状況に適切な表現であるか、英語として自然な表現であるかを確認する。被験者に英語を見直す時間を与えることによって、日本語の構文の影響をできるだけ小さくするように努めた。このようにして、1問ごとに、状況把握、日本語の意味の聞き取り、英文記入、確認と進められた。

データは、構文によって分類された。スペルミス、時制や人称呼応などの文法事項の誤りは無視した。また、会話に最もふさわしい英文を、英語を母国語とする大学の英語教師（各文について3人以上）の意見を参考にして設定した。この文を、目標とするモデル文(Target Sentence)にした。各問題について、モデル文を含めたいくつかの構文別に被験者の人数を集計した。ここでは、「受身」と「主語の立て方」の項目のデータを使って分析する。

## 3.2 結果の分析

### 3.2.1 受身

テストの「受身」の項目は、口頭で与える日本語が「めいわくの受身」になるものだけを対象にして作成された。ここでは5問の結果を紹介する。各文の番号は、テストに使われた番号とは一致しない。データの分析には、語彙や細かい文法的な誤りは無視して、主語は何か、動詞は他動詞か自動詞か、態は何かという点で、被験者がどのような構文を選択するかという分析に焦点をあてた。

日本語の「めいわくの受身」文は、自分（話者）に影響を与えている行為と自分の心情とが同時に伝えられているのに対して、英語では、動作主＋他動詞の文構造で行為を客観的に表現し、心情は別に表現しなければならない。この日英語の違いを日本語を母国語とする学習者はどのように捉えているのだろうか。

[1] 3時間もしゃべられちゃったよ。

☆ He spoke for three hours (on the phone). 82.3%

[2] 週末ずっと雨に降られたの。

☆ It rained all weekend. 79.2%



[ 3 ] (あの白いコート) 弟の汚い手でさわられちゃったの。

☆ My little brother touched it (=the white coat) with his dirty hands.

★ My brother touched it with his dirty hands. 49.4%

It was touched by my brother's dirty hands. 16.1%

I was touched it by my brother's dirty hands. 4.9%

[ 4 ] 電車の中で財布を盗まれたのよ。

☆ Someone took my wallet in the train.

★ Somebody stole my wallet. 9.8%

I had my wallet stolen. 40.8%

My wallet was stolen. 17.3%

I was stolen wallet. 22.2%

## [ 5 ] I don't feel good. I went to the dentist's yesterday.

歯を抜かれちゃった。

☆ He pulled my tooth out.

★ He pulled out my tooth. 18.5%

I had my tooth pulled out. 42.0%

My tooth was pulled out. 12.4%

I was pulled out my tooth. 11.1%

★はモデル文かそれに近い形の文

日本語は5問全て「めいわくの受身」文であるが、英語の文にするときに、日本語の文の意味によって、動作主を主語にとりやすいものとそうでないものがあることをテストの結果は示している。まず、[1]「しゃべられた」と[2]「雨に降られた」は、英語にはない自動詞の受身形であるが、[1]は82.3%、[2]は79.2%が動作主を主語に置いた。一方、[3]「弟にさわられた」は49.4%、[4]「財布を盗まれた」は9.8%、[5]「歯を抜かれた」は18.5%と、動作主+他動詞の構文を使った被験者の割合はまちまちであった。「めいわくの受身」文の意味構造から予測されるように、日本語の受身の影響で英語も受動態にしたものは少なかった。このように文構造から与えられた日本語と英語の関係を明らかにしようとすると、一貫性がないように見えた。しかし、[他動性]という視点に立つと、一つの方向が見えてきた。

他動性とは、行為の主体（動作主）がその行為によって行為の対象にどの程度の影響を与えるかということである（池上，1991）。

例13：① Mary sang. > ② Mary sang the baby to sleep.  
 （主語＋自動詞） （主語＋他動詞＋目的語＋前置詞句）

メアリーが歌うことによって赤ちゃんが眠った②の文のほうが歌うという行為だけを表現している①の文より“sing”の他動性が高いということがいえる。他動性の高さは、例で示されているように、文法形式とある程度対応するが、行為がどの程度行為の対象に影響を及ぼしたかという私たちの知見も決定要因となる（池上，1991）。

前述したように「めいわくの受身」文はその深層レベルの意味構造から、第三者の行為あるいは外界の事態が自分（話者）にかかわっていることを表現していることがわかる。そこで、その行為、事態と自分との距離を、他動性の概念をヒントに見てみることにした。テストの結果にもどると、自動詞の受身文である〔1〕と〔2〕では、「彼がしゃべる」行為と「雨が降る」事態は、自分から離れた外界で起こっている感じがする。反対に、「財布を盗む」、「歯を抜く」行為は、自分に直接的な被害である。「コートをさわる」行為は間接的であるが、気に入っていた自分のコートへの被害は「彼がしゃべる」行為より自分に近い。したがって、

「財布を盗む」 > 「コートをさわる」 > 「彼にしゃべる」

「歯を抜く」

「雨に降る」

の順で、それぞれの行為が、行為の対象である自分（話者）への他動性を高くしていると考えられる。他動性の高い行為ほど、話者は行為を受けた自分と被害の気持ちを強調するために“I”を主語にした使役文を作る傾向が高くなると思われる。

〔3〕に動作主を主語にした文が多かった結果は、主語が「弟」という自分に身近な人であったという点にも原因があるように思われる。前述したように、日本語では、動作主を主語にするとそれが強調されて、行為を受けた対象である話者が動作主を責めている感じがする。したがって、〔3〕では、「弟」を責めている感じを動作主を主語にとることによって表現したとも考えられる。「（彼に）花瓶を壊された」を、40%以上の学生が使役文にしたと述べたが、「あのチビに花瓶を壊されたんだ」にすると、別のグループではあるが、約60%の学生が“He broke my vase.”

を産出する。

[4]の財布を盗まれた犯人はわからないので、日本語ではほとんど動作主が感じられず、“someone”は思いつきにくい。これが「足を踏まれた」という日本語では、22%が“someone”を主語にしていた。「足」は身体から切り離せない不可欠の所有物 (inalienable possession) であり (池上, 1991), 足を踏んだ、つまり、自分に接触した存在が思い浮かぶからであろう。このように、行為が話者にどのような影響を及ぼすか、また、話者と動作主とはどのような関連があるかによって、動作主の潜在性が変わってくることがわかる。[5]「歯を抜かれた」では、モデル文のように動作主である歯医者“he”を主語にすることを日本語から思いつくのは難しい。使役文も使うが、会話の中で“the dentist”という語が出てきたら、“He (She) pulled my tooth out.”が自然な文である。日本語では、歯を抜かれて痛かったという自分の気持ちを強調するので、歯医者が動作主であることは当然であるのに、非常に顕在性を低く認識している。“I had my tooth pulled out.”の意味で「歯を抜いたんだ」という表現さえある。したがって、英語の文にするとき使役文を使う学生が多くなるのである。

### 3.2.2 主語の立て方

「なる」言語である日本語の典型的な文構造の一つは、「無生物主語＋自動詞」であり、その事態を引き起こした動作主はぼやかされる。

[6] コーヒーがノートにこぼれちゃったんだ。

☆ I've spilled the coffee on the notebook.

★ I spilled the coffee... 37.9%

The coffee spilt (or spilled)... 40.8%

(spilled 16.1%, dropped 24.7%)

[7] 靴の中に砂が入っちゃったわ。

☆ I've got sand in my shoe.

★ I got the sand... 7.4%

The sand got into... 47.3%

(got into 9.9%, came into 37.4%)

My shoes got sand... 9.9%

[6]の動作主は、コーヒーをこぼした話者であるが、日本語では、非人称の名詞であるコーヒーを主語に、「こぼれる」という自動詞を続けてコーヒーがあたかも自然にこぼれたような表現をすることができる。一方、英語では、動作主“I”を主語にして、他動詞“spill”を使うのが自然な構文である。[7]の問題では、「私」が歩きながら靴の中に砂を入れてしまったのだが、無生物の「砂」を主語にして自動詞「入る」を用いた構文を日本語では自然に使う。英語は、“I”が主語に、動詞は“have got (=have)”をとる。この“have”の使い方は、人間的な[所有]の表現形式が[存在]の表現に転用される英語の傾向を示す例で、「あります」と対比される。日本語は、反対に、非人間的な[存在]の表現形式が[所有]の表現に転用される(池上, 1988)。

例14: a) This room has two windows.

b) この部屋は2つ窓があります。

c) John has two children.

d) ジョンは二人子供がいます (あります)。

本来なら、窓には「あります」と“there are...”が、子供には“have”と日本語ではそれに相当する語がないが[所有]を意味する語が適当であろう。したがって、“have”と「あります」との対比は、「する言語」である英語と「なる言語」である日本語の性質を表す極端な表現形式であるといえる。

テストの結果をみると、第一に、被験者の半数近くが日本語の「無生物主語+自動詞」構文の影響を受けていることがわかる。これは、発想の転換の難しさから推測できたが、問題は、“I”を主語にした文を作った被験者の割合が、[6]と[7]とで違うことにある。[7]より[6]のほうが“I”を主語に置くことを思いついた人が多かった理由の1つは、先ほど述べたように、[7]の“I have got”の習慣的な使い方が学習者に難しかったということが推測できる。しかし、もう1つ注目したい違いは主語としての話者「私」の顕在性である。「コーヒーがこぼれている」の「こぼした」行為は「靴の中に砂が入った」の「入れた」行為より、動作主としての「話者」の意識が強い。砂は歩いている間に話者が気がつかないまま入ることがある。つまり、学習者にとって[6]のほうが主語の“I”が浮かびやすいことになる。このように文の意味と状

況から感じられる、つまり学習者のスキーマによって解釈される動作主の顕在性が英語の文の主語の選択に影響を及ぼしていると思われる。

[7] では「入った」に“came into,” “got into,” “got” などを使っていることから、被験者が「わたし」の意志とは関係なく砂が自然に入ってきた様子を表現しようとしている姿勢がうかがえる。

次に、日本語にはない英語の「無生物主語＋他動詞」の構文は、どのように表現しているだろうか。

[8] ブルーの電車に乗れば大宮に行けますよ。

☆ The blue train takes you there.

★ The blue train will take you... 1.9%

If you take the blue train, you will... 39.5%

[9] 暑いので体がだるいよ。

☆ The heat makes me feel tired.

★ The heat made me tired. 7.4%

I'm tired because of the heat. 50.6%

It's hot and I'm tired. 9.9%

[10] このスープを飲めば暖まるよ。

☆ This soup will warm you up.

★ This soup will warm you up. 4.4%

★ This soup will make you warm you up. 22.9%

You will be warm if you... 54.7%

[10] は、「コミュニケーションに関するテスト」の前段階として作成されたパイロットスタディのテストの結果である。モデル文が「無生物主語＋他動詞」の構文であるのに対して、日本語の文は複文である。テストの結果をみると、日本語の構文をそのまま英語に応用しているものがほぼ半数の解答に見られた。しかし、モデル文かそれに似た形の文を使った被験者の数は違っていた。[8] で“the blue train”を主語にした文は1.9%、[10] では“this soup”を主語にとったものが、“warm”を他動詞として使った文と“make”を使った使役文を合わせると27.3%であった。[8] の「電車に乗る」行為が「大宮に行ける」という結果を、[10] の「スープを飲む」行為が「暖まる」という結果をもたらすことを比較すると、漠然とではあるが、「大宮に行ける」には行為者の意志が、

「暖まる」には外界からの影響が感じられる。この違いが数字に表れたのではないだろうか。このように、表面的な文構造が同じであっても、文の意味が示す行為や現象を、学習者は自分のスキーマによって解釈しているので、その結果産出される英語の文構造が多様になることが、データの再分析から推測された。

#### 4. まとめ

中間言語 (interlanguage) に見られる転移 (language transfer) の研究は、外国語あるいは第2言語の産出過程 (production process) で、学習者がもっている、多くは母国語からの言語的知識をどのように利用しているかを明らかにしてきた。これらの多くの研究は、音声学的な (phonological) 面、文法的な (morpho-syntactic) 面、テキストや文のスタイル (discourse and pragmatic) など、母国語と対象言語 (the target language) の言語的な差異 (linguistic differences) に視点をおいている。「コミュニケーションに関するテスト」のデータを使った分析にあたってきた私たちの研究も、表面的な文構造の転移についてのデータを集めることを目標にしていた。しかし、データを再分析してみると、「めいわくな受身」文の深層レベルの意味構造が英語の受動態とは違うことがあきらかになったように、文の意味の深層構造を理解することで、日本語と英語の関係をさらに正確に、簡潔に説明できることがわかった。そして、その法則が明確でない場合、学習者は、言語の意味を自分のスキーマによって解釈し、その意味を英語に表現しようとしているという認知レベルの転移が考えられることを示唆していた。

与えられた日本語の意味を解釈して、英語の文を産出するまでの理解の過程は、認知レベル (level of processing) の深い情報処理ということがいえる。そこで、逆に、学習者の理解の深さを、英語力 (English proficiency) の違いによって見ていくと、さらに興味深い結果が得られるであろう。英語力の低い学習者は言語の情報処理に負担がかかり、言語レベル—表面的な文構造—の影響を受けやすいが、高い学習者には、より深い認知レベルの転移が見られるという仮説が成り立つからである。



今回の分析は目的の違うテストのデータを使ったため、結果から導き出される結論は推測の域を越えない。したがって、適切なデータを取りなおして、これらの問題を実証していきたい。

### 参考文献

- 安藤貞雄. 1986. 『英語の論理・日本語の論理』大修館書店.  
 荒木博之. 1985. 『やまとことばの人類学』朝日選書.  
 Iwata, Yuko, Saeko Fukushima, Hiroko Matsuura and Hiroko Suzuki.  
 1990. "What is the Japanese-like English? — An Analysis of Errors  
 Caused by the Transfer from Japanese." 大学英語教育学会第29回全国  
 大会.  
 池上嘉彦. 1982. 「表現構造の比較—〈スル〉的な言語と〈ナル〉的な言語」  
 国広哲弥編『日英語比較講座：発想と表現』大修館書店.  
 —. 1991. 『〈英文法〉を考える』ちくまライブラリー.  
 金田一春彦. 1988. 『日本語（下）』岩波新書.  
 小島義郎. 1987. 『日本語の意味 英語の意味』南雲堂.  
 国広哲弥. 1988. 「日英両語比較研究の現状」国広哲弥編『日英語の比較 8』  
 研究社.  
 松浦浩子, 岩田祐子. 1991. 「日本人英語学習者の中間言語に見られるトラン  
 スファーの諸要因」JAAL-in-JACET (大学英語教育学会応用言語学研究  
 会) 第2回研究大会.  
 三浦つとむ. 1976. 『日本語はどういう言語か』講談社学術文庫.  
 水谷信子. 1985. 『話しことばの文法』くろしお出版.  
 大津栄一郎. 1993. 『英語の感覚（上）』岩波新書.  
 ピーターセン, M. 1988. 『日本人の英語』岩波新書.  
 Suzuki, Hiroko and Taeko Sato, 1991, "Sentence Structural Preference  
 of Japanese Students," Tokyo JALT's Spring Conference.  
 Suzuki, Hiroko, Hiroko Matsuura, Taeko Kamimura, Yuko Iwata and  
 Saeko Fukushima, 1992, "Language Transfer in Japanese EFL  
 Learners' Sentence Construction," 関東甲信越英語教育学会研究紀要, 第  
 6号, P55-70.  
 寺村秀夫. 1991. 『日本語のシンタックスと意味 I』くろしお出版.  
 外山滋比古. 1992. 『英語の発想・日本語の発想』NHKBOOKS.